

# 未来の出来事とモダリティ

兼 沢 純 子

will+原形動詞、be going to+原形動詞、現在進行形は、いずれも未来の出来事を表すとされているが、この三者の間で、意味の重なりが見られる場合もあれば、はっきりと区別される場合もある。be going to+原形動詞は、その出来事が近い未来におこることを表すと、従来説明されてきたが、近い未来、遠い未来という概念は相対的なもので、物理的な時間というよりは、発話内容である出来事に対する話し手の心理的なとらえ方による。この話し手のとらえ方こそ、出来事である「命題」に対する話し手の「心的態度」であるモダリティである。こういった、出来事に対する話し手のとらえ方の様に、同一の「命題」に対する話し手の様々なモダリティが will+原形動詞、be going to+原形動詞、現在進行形によって、どのように表現されているかを探るのが、この小論の目的である。

## 1. モダリティ

論を進める前に、中右 (1994) に従って、モダリティを以下のように定義しておくことにする。

文の意味は客観的意味成分である<命題>と主観的意味成分である<モダリティ>からなる。<命題>は表現主体である話し手から独立した客観的な事態を表すものであり、<モダリティ>は、瞬間的現在時である発話時点において、話し手がとる心的態度であって、状況もしくは事態に対する話し手のとらえ方 (判断・発話態度) を表す。

中右 (1994) によれば、モダリティは、「心的態度」と「話し手」と「瞬間的現在」という三つの要素概念から成り立つもので、心的態度、話し手、瞬間的現在の順で優位性が高く、最初の心的態度は必須の要素である。この三つの要素をすべて満たした言語表現が、モダリティ表現のプロトタイプとなるものである。この三つをすべて満たしていない言語表現はモダリティ表現とは言えず、その発話には話し手の心的態度は表現されていない。また、<モダリティ>は、命題内容の真偽値について話し手が下す査定判断である内在的義務的成分の命題態度である<Sモダリティ>と、話し手が自らの発話行為についていく意識 (意図、姿勢) である談話要因に起因する随意意味成分である<Dモダリティ>とにわかれる。

モダリティは意味範疇に属するもので、特定の文法範疇と必ずしも不可分のものではない。英語においても、法助動詞のように、モダリティを本来の機能とする文法範疇はあるが、モダリティを担うのは法助動詞だけではなく、モダリティーとそれを表示する文法形式との関係は多種多様である。

今まで、同一命題を持つ異なった文法構造の間の用法の差を説明するのに、「こういう時に使われる」とか、「こういう含意がある」という説明の仕方がされてきたが、それを、命題に対する話し手のモダリティ、つまり、話し手はその命題をどのようにとらえているかという見地から見えていくことによって、統一された説明が可能になるとというのが、この小論の主張である。

## 2. 未来の出来事を表す表現とモダリティ

文法的には、現在時制と過去時制があり、未来時制はない。しかし、概念的には、現在時、過去時、未来時の区別がある。そこで、未来時がどのように文法的に表現されるかという問題がある。will+原形動詞、be going to+原形動詞、現在進行形は、この未来を表現する文法構造の一部である。これらの表現が、どのようなモダリティを表しているかを、江川（1991）の文法的説明を援用して、その差に注目しながら、用例を通して見ていくことにする。

用例には、主に、江川（1991）の用例と、映画「グッドナイト・ムーン（原題 STEPMOM）」（1999）から採取した会話用例を用いる。現実の言語使用の場面においては、モダリティも含めて、文の意味が言語形式だけでは確定されない場合がある。この曖昧性を解消するには、言語内、言語外のコンテキストに依存しなければならない。映像媒体がすぐれているのは、その言語外コンテキストが映像という形で与えられていることである。特に、未来の表現を取り扱う場合、時間軸に沿って話が展開されるストーリーであれば、現在の出来事について述べているのか、未来の出来事について述べているのかの判断がつきやすいという利点がある。

この映画は次のようなストーリー展開になっている。売れっ子の写真家であるイザベル（ジュリア・ロバーツ）は、恋人である弁護士ルーク（エド・ハリス）との同居生活をスタートさせ、彼の離婚した妻との間の 12 才の娘アナと 7 才の息子ベンに気に入られようと奮闘するが、うまくいかない。元妻であるジャッキー（スーザン・サランドン）は完璧な母親で、二人はことあるごとに衝突する。ルークはイザベルに結婚を申し込むが、ジャッキーが癌であることがわかり、過去の母親と未来の母親は新しい家族を作っていく。現代のニュー・ヨークを舞台にした、日常に使われる標準的な英語が話されていて、現代英語の用法を検討するには適切なものといえる。

### 2. 1 will+原形動詞

まず、will+原形動詞には、単純未来として、主語の意志に関係なく、未来に起ると予測される事柄を表すとされる用法があるが、これは、モダリティ的に言えば、発話時点における、話し手の、未来に対する推測である「予測判断」を表している。

#### (1) I will be seventeen next birthday.

今度の誕生日に 17 歳になります。

この文は未来時（次の誕生日）にあてはまる出来事（わたしが 17 歳になる）と、瞬間的現在時にあてはまる出来事（次の誕生日にわたしが 17 歳になると予測する）の二つの部分、「命題」と「予測判断」というモダリティの二極から成り立っている。そして、この予測判断の文法的担い手が will である。

#### (2) Some days you'll experience drowsiness, nausea.

眠くなったり、吐き気をおぼえる日もあるでしょう。

映画の中で、化学療法を受けるジャッキーに、医師が副作用について話すセリフだが、ここに、主語の身に将来起るであろうことに対する話し手の予測というモダリティがある。この文の意味は、「将来のある時点において、あなたが眠くなったり、吐き気をおぼえるということが起ると、わたしは予測する。」ということである。

この予測がはずれる可能性を話し手が認めていない場合は、「未来に対する推断」というモダリティが発生する。他人の行動に断定的な予測を下せる人は、予測を実現するように強制できる立場にあるから、will+原形動詞は命令や警告を表すことができる。

#### (3) You'll be sorry for this later.

後でこのことを後悔することになるよ。

この発話では、未来に対する通常の「予測判断」の他

に、「警告」や「脅し」というモダリティが表現される。ある発話がどのようなモダリティを持つかが、曖昧であるときは、話し手と聞き手の関係を含めたコンテキストなどの語用論的情報が、その曖昧性を解消する手がかりとなる。

また、**will**+原形動詞には、意志未来として、主語の意志を表すとされる用法があり、単なる意志から決心・約束・固執・主張・(否定形で)拒絶などを表わし、そのどれを意味するかはコンテキストなどにより判断される。

(4) **If he doesn't take back what he said, I'll never speak to him again.**

もし彼が前言を取り消さなければ、もう絶対に彼と口をきかないつもりだ。

このモダリティは話し手の未来に起る出来事への「決意」である。彼と口を聞かないのは未来時に属することで、その「決意」のモダリティは発話時点に属する。

中右(1994)によれば、話し手が人の心的態度を報告することができるためには、発話時点に先立って、それが話し手に接触可能な情報になっていることが保証されていないと保証されない。一人称主語の **will**+原形動詞が意志未来として、話者の意志を表すことができるのは、その心的態度である意志が、話し手にとって、唯一確実に保証された、接触可能な情報であるからである。

意志未来が、二人称・三人称の主語の意志を表すとされるときがあるが、ここでも、話し手のモダリティが表現されている。

(5) **If you will do it again, do it as your own risk.**

どうしてもまたやるというなら、自分の責任においてやりなさい。

Leech (1971)によれば、この **will** には、主語の頑固さに対する話し手の「いらだち」が示されている。ここには、発話時点に先立って、主語の「頑固な意志」が話し手に接触可能な情報になっていて、その接触可能な情報から予測判断して生じた話し手の「いらだち」という

モダリティが表現されている。

**won't** が無生物主語にまで拡張されて、「どうしても…しない」の意味になるとされる場合も、無生物が意志を持っているのではなく、意志を持っているようだと、話し手が判断し、そこから生じた「いらだち」などのモダリティが表現されている。

(6) **The bag won't fasten properly.**

かばんがどうしてもちゃんと閉まらない。

**will**+原形動詞には、現在の状況に対する推量を表すとされる用法もある。

(7) **He will be in Paris at the moment.**

彼は今パリにいるだろう。 (中右)

これが Sweetser (1990) の主張する、認識的意味の「未来における真否の確認」の **will** である。Sweetser (1990)によれば、認識的モダリティは、根源的モダリティがメタファ写像されることによって拡張されたもので、現実的な未来性の **will** が認識的な未来性へと拡張されていて、出来事そのものが未来に起るのではなく、出来事の発見ないしは証明が未来に属するとしている。

モダリティに着目してみると、この **will** は、発話時点における話し手の、接触可能な情報に基づいた「予測判断」を表していることがわかる。現在の出来事に対して、予測ということばが用いられるのは、その予測の真否の確認が未来に属するからにすぎない。現在の出来事に対して、発話時点で、判断を下しているのである。

以上のことから、**will** の基本的な意味は、命題に対する話し手の「予測判断」というモダリティであって、**will**+原形動詞が未来の出来事を表すということは、そこに、未来に起ることに対する、発話時点での、話し手の「予測判断」というモダリティが表現されていると結論づけられる。

**will**+原形動詞は、条件の **if** 節を伴って使われることが多い。条件節に **will** が使われないのは、そこに「予測

がなく、帰結節に **will** が使われるのは、現在もしくは未来に対する、その条件下で、話し手の「予測判断」がなされるからである。未来に対する予測であれば、まだ起こっていない出来事に対する予測であり、現在に対する予測であれば、まだ検証されていない出来事に対する予測である。**will**+原形動詞が、条件の **if** 節を伴うことや、言外に条件が含まれていることがあるのは、発話時点までに接触可能な情報があったわけではなく、発話時点で、条件という形で接触可能になった情報からの話し手の予測が **will** に表現されていることを意味する。

## 2. 2 be going to

**be going to**+原形動詞には、通例何かが起りそうな徴候があり、その徴候から判断して近い未来に「…しそうだ」という話し手の予測というモダリティが表現されている。

(8) The sky is clouded over; I'm afraid it's going to rain.

空がすっかり曇っている。どうも雨になりそうだ。

**be going to**+原形動詞で表現される事態は、アスペクト的にいえば、未然相（事態がある時点ではまだ実現していないが、これから起る）に属する。**be going to**+原形動詞は、現在の徴候から見て、ある出来事が将来の実現に向けて動き出していることを含意している。この現在の徴候は、中右（1994）の言う接触可能な情報にあたり、この現在の徴候を基にして、話し手は命題が未来に実現すると判断し、その「予測判断」というモダリティを **be going to** を用いて表明する。もともと、**be going to** という表現は、空間的に目的地に向かっていているという意味であったのが、時間軸に沿って、ある行為の実現に向かっていていることに拡張されたものであると考えられる。

**be going to**+原形動詞はすでに現在において、何かの徴候があることを前提にするから、近い未来の予測を表すのが普通であり、**will**+原形動詞は前提のない話し手の単なる予測、もしくは、何らかの条件下の予測であるから、近い未来でも遠い未来でもよいことになる。

(9 a) He is going to get better.

（じきに）よくなるだろう。

(9 b) He will get better.

（そのうちに）よくなるだろう。

江川（1991）によれば、(9 a) が「熱が下がったから／食欲が出たから」というような徴候があることを含意するのに対し、(9 b) は「医者がいいから／手当てがいいから」というような気持ちを含む。(9 a) は徴候から見て、病状が改善の方向に向かっているのに対し、(9 b) ではまだ、病状の改善は見られない。

また、**be going to**+原形動詞は、発話時点よりも前から（あらかじめ）考えていた意図をあらわすことがある。日本語の「…するつもりです」に相当し、その場で思い立ったことではなく、前から考えていた意図・計画などを表す。一方、**will** は、その場の状況に応じた意図を表すとされる。

(10 a) A: "There's no milk in the refrigerator."

B: "I'm going to get some today."

「冷蔵庫に牛乳がないよ。」

「きょう買って来るつもりなのよ。」

(10 b) A: "There's no milk in the refrigerator."

B: "I'll get some today."

「冷蔵庫に牛乳がないよ。」

「(じゃあ) きょう買って来ましょう。」

江川（1991）は、(10 a) は牛乳がないことを知っていて、買いに行くという含みがあり、(10 b) は、言われて、買いに行くつもりになったと説明している。この説明をモダリティ的に敷衍すれば、(10 a) では、話し手 B は、話し手 A に言われるまでに、すでに冷蔵庫に牛乳がないという情報に接触していたので、買いに行くという「意図」のモダリティが表現されているが、(10 b) では、発話時点では、牛乳がないという情報に接触していなかったため、話し手 A に言われての、その場での「決意」というモダリティが表現されている。

いずれの場合も、発話時点での、未来に起る出来事に

対しての、話し手の「予測判断」というモダリティを表しているが、その判断の根拠になる接触可能な情報の発話時点までの有無により、両者は使い分けられている。**be going to**は、接触可能な情報から判断して、「発話時点において、既に未来の実現に向けて動き始めている」という予測判断をにない、**will**は「発話時点においては、未来の実現に向けてまだ動いていないが、その時点で動き出す」という予測判断をになっている。

主語が一人称である場合は、話し手の意図というモダリティは明白であるが、主語が一人称でない場合は、話し手が主語の意図を予測判断しているというモダリティが表現されるためには、何らかの事実関係の認識が必要となる。主語の意図や個人的予定などについて、話し手が何らかの事実を知りうる立場にあれば、**be going to**を用いることができる。<sup>注1</sup>

(11) **Of course Jackie's going to be irrational, hostile, defensive.**

もちろん、ジャッキーは腹を立て、敵対心を持ち、身を守ろうとします。

この用例では、別れた夫の恋人が子どもたちと接することに苛立ちを感じるようになることを、その夫が発話時点までの接触可能な情報（ジャッキーの性格や、このような状況のときの当然の反応など）から判断して、将来起ることとして述べているわけである。

(12) **Baby, Isabel's not gonna take my place as your mom.**

イザベルはわたしの代わりにあなたのお母さんになるのじゃないのよ。

これはジャッキーが子どもたちに向かって言う言葉だが、ここでは、話し手であるジャッキーは、接触可能な情報から、イザベルが子どもたちの母親になる意図がないと判断して（あるいは期待して）、この形式を使っている。この表現は、従来は、主語の意図と説明されてきたが、モダリティ的に見れば、主語の未来の意図に対する、

発話時点での、話し手の「予測判断」を示している。

同様に、父親が子どもたちに次のように言う。

(13) **It's just that Isabel's going to be in your life and hopefully you can learn to accept her.**

イザベルがおまえたちの生活に入っていくだけで、できれば彼女を受け入れるようになって欲しい。

この表現形式を用いたのは、イザベルが子どもたちの生活に入っていくことが、イザベルの将来の予定であることを、イザベルの恋人という立場から、あらかじめ知りえているからである。この場合の**be going to**の意味は、「(主語が) …するつもりだと、(話し手は) 予測する。」ということになる。

### 2.3 現在進行形

現在進行形は近い未来の個人的な予定を表すのによく使われ、その手配や約束ができていているという含みを持つとされている。なお、現在進行形で未来を表す場合は、前後関係から未来を示すことが自明でない限り、未来を示す副詞語句が必要である。現在進行形が、現在進行中の出来事を述べているのか、未来の出来事を述べているかの判断は、中右の言う接触可能な情報にあたる言語内、言語外コンテキストによるからである。未来を示す副詞語句はこの言語内コンテキストを提供する。

現在進行形で表現される事態は、アスペクト的にいえば、現然相（活動が始まって、現在進行しているが、未了である）に属する。従って、現在進行形で表された未来というのは、未来に起る出来事が、現在において、準備や手配などの形で、すでに動き出していることを含意する。

(14) **I'm leaving tonight. I've got my plane ticket.**

私は今晚出発します。飛行機の切符は買ってあります。

未来の予定は、**be going to**+原形動詞でも表すことが

できるから、現在進行形と **be going to**+原形動詞のどちらも使うことができる。

(15 a) **I'm meeting Tom at the station at 6.**

トムを6時に駅に迎えに行く予定です。

(15 b) **I'm going to meet Tom at the station at 6.**

トムを6時に駅に迎えに行くつもりです。

江川 (1991) によれば、(15 a) にはトムと約束をしているという含みがあるが、(15 b) にはその含みがなく、自分だけの「つもり」である。ことばを替えて言えば、(15a) では、外的に約束をすることで、すでに事態は未来の実現に向けて動き出しているが、(15 b) では、その方向に向けて心理的に、つまり内的に動き出しているだけである。

(16) **I'm picking up Benjamin from a birthday party, and I lost the address.**

わたしはベンジャミンを誕生パーティから迎えに行くところで、住所を書いたメモをなくしてしまっただけです。

(16) は、「意図」もしくは「予定」のモダリティが表現されている。ベンを迎えに行く途中で、イザベルが車の窓から住所を書いたメモを飛ばしてしまった後で、電話をかけている場面での発話である。ベンを車に乗せて帰るという出来事は未来のことであるが、すでに車を運転して、迎えに行くという行為は始まっている。

(17) **You're taking the kids and moving to Los Angeles.**

子供たちを連れて、ロサンゼルスに移るつもりなのね。

これは、ジャッキーがすでに購入していたロス行きの切符を見つけた後で、イザベルが言うセリフである。ジャッキーが子供達をロスに連れて行く予定は、すでに飛行機の切符の購入という、外的、具体的行動によって動

き出していると、イザベルが判断したことを、現在進行形は表している。主語であるジャッキーの「(確定した) 予定」を、話し手であるイザベルが「予測判断」していることになる。切符は言語外コンテキストとして与えられた接触可能な情報である。

**be going to**+原形動詞や現在進行形には、二人称、三人称主語に対する「予測判断」のモダリティから、別の種類のモダリティを派生することがある。吉川 (1995) は「事態の起る確実性は高いが変更もありうる」といった場合には、確言を避けて、進行形が用いられる。進行形を用いれば、単純形の持つ断言的な響きをゆるめることができるからである。」と述べているが、変更もありうる予定・計画に関する緩和的陳述としての現在進行形には、話し手の事態に対する「陳述緩和」というモダリティが表明されている。

(18) **He is rehearsing tomorrow.**

彼は明日リハーサルをする予定です。(吉川)

これに対して、現在形が未来の出来事を表現するのに使われることがあるが、吉川 (1995) は、現在形が使われるのは、変更の余地がない予定・予告を述べる確信的陳述としてであるとしている。ここに、話し手が確信を持って、相手に伝えるというムード的機能である「確言」のモダリティが表明されている。

(19) **He rehearses tomorrow.**

彼は明日リハーサルをします。(吉川)

ミントン (1999) は、現在形が未来時制を表すのに使われるのは、「公共的な事柄の予定」について述べるときであるとしている。この場合、現在において、未来の予定が変更不可能なものとして決定されている。ことばを替えて言えば、未来における命題が、現在時においてすでに決定済みという「確言」のモダリティがある。

また、柔らかい語調の指示という「緩和的意志」というモダリティを、**be going to** や現在進行形は表すことができる。ここに、出来事に対する、話し手の「予測判断」

という緩和的要素が存在するからである。

(20) You are going to bed early tonight.

今晚は早く寝るのよ。

(21) You are sitting with Laura.

ローラと一緒に席に着くのよ。 (吉川)

過去進行形や、be going to の過去形は、実行されなかった予定や意図を含意する。これは、過去の予定・計画が変更もありえたものであったという「緩和的陳述」のモダリティを持つ。以下の例は、前の節の話し手のモダリティが、後ろの節の過去に実際に起ったことによりキャンセルされている例である。

(22) I was leaving Japan that night, but I couldn't because of the typhoon.

私はその夜日本を発つ予定だったが、台風のために発てなかった。

(23) I was going to leave Japan that night, but I decided not to.

私はその夜日本を発つつもりだったが、取りやめた。

(22) では、乗る飛行機の切符の購入などで、すでに事態は実現に向けて動き出していたところを、台風によって飛行機が飛ばなかったことで、実現に向けて動き出している「(確定した) 予定」のモダリティがキャンセルされたのである。一方、(23) では、日本を発つという方向に向けて、話し手の心的予定である「意図」が設定されていたので、その「意図」がキャンセルされたことになる。

### 3. 結び

未来の出来事を表現する will, be going to+原形動詞、現在進行形をモダリティという観点から考察してきたが、この三つの異なる構造の文は、未来に起る出来事に対して、発話時点における、話し手の「予測判断」という

モダリティを表すという点で共通している。未来時において主語に起る出来事に関して、発話時点における接触可能な情報をもとに予測判断をするときは、will+原形動詞を用い、発話時点において、未来の実現に向けて、何らかの徴候や主語の意図という接触可能な情報をもとにした予測判断であれば、be going to+原形動詞、すでに実現に対して現実に動き出していることを示すような接触可能な情報から予測判断する場合は、現在進行形を用いるという使い分けがされていることがわかった。

will, be going to、現在進行形は、いずれも、将来起ることについての話し手の予測判断を表すが、will, be going to、現在進行形の順で、予測の割合が高く、実現の見込みの割合が低い。ことばを替えて言えば、現在進行形、be going to、will の順で、将来起ることについての話し手の実現に対する確信度が高いということになる。

この「予測判断」という基本的なモダリティから、一人称主語の場合は、未来に起る出来事に対して、コントロールが可能であるかどうかや、接触可能な(内的)情報により、will には「予測」・「意志」・「決意」・「約束」・「主張」などのモダリティが、be going to には「意図」・「予定」などのモダリティが、現在進行形には「(確定された) 予定」などのモダリティがそれぞれ派生する。

二人称、三人称主語の場合においても、未来に起る出来事に関して、主語に起る出来事に対する、接触可能な情報に基づいた、話し手の「予測判断」が表明されている。従来、主語の意図や予定を表すとされてきた表現は、主語の意図や予定に対する話し手の「予測判断」というモダリティを表現している。この「予測判断」から、will には話し手の、「予測」・「いらだち」・「脅迫」・「命令」・「依頼」・「勧誘」<sup>注2</sup>などのモダリティが、be going toや現在進行形には、話し手の「陳述緩和」・「緩和的意志」などのモダリティが派生する。

実際の発話の場面においては、「意図」と「予定」のように、複数のモダリティが同時に作用する場合があるので、この三者の使用には、厳然たる線引きがされるわけではなく、三者の使用の分布に重なりが見られることがある。

この小論で取り上げた以外にも、別々の文法項目に基づき言語現象として、これまで論じられてきた種々の文法構造を、意味構造であるモダリティという観点から見直してみると、一見無関係に見えた多種多様な現象の背後に共通するものを、発見することができると思われる。

注1 あまり親しくない間柄の人に **be going to** を用いた質問をすると、立ちいった質問に受けとられることになるのは、このためである。

注2 相手の意志を尋ねて、実質的には、依頼・勧誘・招待などを表すとされる **Will you...?** の形は、**Will** が「依頼」・「勧誘」・「招待」などのモダリティを表明しているが、疑問文であるから、主語である聞き手の意志が接触可能な情報になっている必要はない。

## 用例出典

江川泰一郎 (1991) 英文法解説 金子書房

中右実 (1994) 認知意味論の原理 大修館書店

吉川千鶴子 (1995) 日英比較動詞の文法 くろしお出版

DVD 「グッドナイトムーン (原題 STEPMOM)」

(株) ソニーピクチャーズエンターテイメント

(映画用例と、特記した用例以外は江川による。)

## 参考文献

井内邦彦 (1997) コミュニケーションのための英文法教室  
築摩書房

江川泰一郎 (1991) 英文法解説 金子書房

中右実 (1994) 認知意味論の原理 大修館書店

(1999) 「モダリティをどう捉えるか」

「言語」 vol.28.No.6 大修館書店

T.D. ミントン (1999) ここがおかしい日本人の英文法  
研究社出版

吉川千鶴子 (1995) 日英比較動詞の文法 くろしお出版

Leech, G.N (1971) *Meaning and the English Verb*, Longman

Palmer, F.R (1979) *Modality and the English Modals*, Longman

Sweetser, E.E (1990) *From etymology to pragmatics*,

Cambridge Univ. Press

(「認知意味論の展開」澤田治美訳、研究社出版、2000)

この論文は、平成11年度～13年度塚本学院教育研究補助費による研究成果に基づいたものである。